

# 日本人サッカー選手の移動プロセスに関する研究

ーシンガポールを中心にー

後藤 貴浩

## 1 日本人サッカー選手と越境

2017年、熊本県の少年サッカークラブの指導者たちが集まり、『熊本から世界で活躍する選手』を育成するプロジェクトをスタートさせた。小学校4年生以下の子どもたちが年間36回の練習会と海外遠征に参加する企画である。2018年は9月4日～13日の期間にイタリアで開催される大会に参加した。練習会は入会金5,000円、年会費15,000円、月会費10,000円の年額140,000円、海外（イタリア）遠征は約450,000円を要する。また、近年、全国各地に「バルセロナ」「インテル」「アーセナル」「ドルトムント」などヨーロッパの有名クラブの少年サッカースクールが設立されるようになった。そこでは、海外での「本家」クラブコーチの指導や同年代の子どもたちとの対戦がプログラムに組み込まれている。クラブチームでの海外遠征も盛んになっており、2018年度東京都U-15サッカー1部リーグでは、登録チームの半数が海外遠征に出かけている。サッカー少年にとって今や「海外」は特別なものではなくなりつつある。

筆者は、2012年から東南アジアでプレーする日本人サッカー選手に関する調査を行ってきた<sup>1)</sup>。その中で印象的だったことは、スマートフォン片手に各国のサッカーリーグや生活情報を収集し渡り歩く日本人選手たちの身軽さであった。2017年09月30日に配信された『フットボールチャンネル』ではフィリピンリーグに参戦する選手が取り上げられ、次のようなコメントが記載されている<sup>2)</sup>。

どの国に良いエージェントがいる、どのリーグの運営が

きちんとしている、といった情報は、いったんこの『東南アジア・サッカー・サーキット』に入るとまわってくるようになる。そこで得た情報をもとに、自分でエージェントを探して次の道を探っていく。契約を破られるような理不尽なことがあっても、必要以上に気持ちを乱すことなく冷静に解決策をたどっていく。

このようなスポーツ選手の国際的移動については、移動に関わる要因や効果（リスク）に関する研究（高橋，2004 など）や労働移民研究（石原，2013 など）で取り組まれてきた。特に、国際的に移動するスポーツ選手の類型化（Maguire Joseph, 1996・1999）に基づく、スポーツ労働移民の研究では多くの研究蓄積が認められる。しかし、これまでの研究を俯瞰してみた場合、移動の現実的な状況を示したものは少ない。国際的な流動化が常識的となってきたサッカーにおいても、選手の移動に関する全体像や流れについては明らかになっていない。

それには以下の理由があると思われる。まず、おおむねピラミッド型で構成される各国リーグには、1部リーグから下位リーグの末端まで含めると相当数のチーム数があり、3部以下に所属する日本人選手を把握することは困難である。また、サッカーの場合、プロチームに所属しても練習生、アマチュア、プロ、セミプロなど状況に応じて選手の立場が変化する。プロ選手が1か月後にはアマチュア契約になったり、ノンプロリーグであってもJリーガーよりも高い給料でプレーする日本人もいる。さらに、流動性が高いリーグ（東南アジアなど）では、半年や三か月ほどで別の国のリーグへと移籍する選手もいる。

そこで本研究では、シンガポールを中心に東南アジアにおける日本人サッカー選手の移動に関する全体像や流れについて、より実態に即した形で把握することを目的とした。そのために、まず、国内の移籍状況の概要を2018年シーズンのリーグ開始時期に各チームからリリースされた選手移籍情報をもとに集計した。次に、東南アジア各国リーグについて、データ収集が可能であったシン

ガポール、カンボジア、タイ、フィリピン、マレーシア、ラオス、インドネシア、ミャンマーに限定し、それぞれの国のリーグ情報を発信している Web サイトや選手が発信する SNS の情報を手掛かりに日本人サッカー選手の移動状況について確認した。そのうえで、2012 年から筆者らが現地でもインタビュー調査<sup>3)</sup>を行った 17 名の日本人サッカー選手の情報をもとに、その移動プロセスについて検討した。

## 2 日本人サッカー選手の移籍状況

### 1) 国内移籍状況

日本人サッカー選手の東南アジアにおける移籍プロセスを検討する前に、国内(Jリーグ)での移籍状況について確認しておこう。表 1 は、2018 年シーズン<sup>4)</sup>の開幕直後(2018 年 3 月 30 日)に Jリーグ情報 HP 『J's GOAL』<sup>5)</sup>に掲載された移籍情報をもとに集計したものである。集計に際しては、レンタル移籍が完全移籍の別については考慮しなかった。また、レンタル元に戻った後に再度レンタルで出されたり、完全移籍でも再度レンタルされたりする可能性があるため、加入と転出に分けて集計した。

まず指摘できるのは、J1 - J2 - J3 の格差、特に J2 - J3 間にある格差である。加入についてみると、J1 では J1 からの水平加入(25.1%)が最も多く、ついで J2 からの昇格加入(22.8%)となっているが、J2 では同じく J2 からの水平加入(30.3%)が最も多いものの、J1 からの降格加入(29.0%)とあまり差はなく、J3 からの昇格加入は 6.1%と少ない。J3 では J3 からの水平加入(21.5%)よりも J2 からの降格加入(35.6%)が多くなっている。このことは昇格の困難性(カテゴリー間の格差)を表しており、転出先のデータから見るとより明確となる。J1 では J2 への降格転出(42.4%)が圧倒的に多く、J2 では J2 への水平転出(29.9%)、次いで J3 への降格転出(19.3%)となっている。J3 でも水平転出(20.7%)が最も多いが、実際はアマチュアリーグである JFL 及び地域リーグへの降格転出が最も多く両者を合わせると 36.7%となる。

このようなカテゴリー昇格の困難性は、新入団選手の動向にも影響を受けていると思われる。高校の部活動や下部組織のユースチームから入団した選手はJ1で23.4%、J2で8.8%、J3では1.1%となっており、特にJ1では他チームからの移籍よりも若手選手の新規獲得によりチームを編成する傾向があることがうかがえる。一方で、大学卒の選手は、J1で11.7%、J2で13.8%、J3で16.9%と各カテゴリーで一定程度の割合で加入しているが、高校やユース上がりの選手の加入とは逆にJ3が最も多くなっており、カテゴリー昇格の困難性や選手寿命の短さを考えるとその後の道の厳しさが想像される。このことは、引退・退団の割合にも表れており、その割合はJ1で8.6%、J2で17.8%、J3では29.3%と最も多くなっている。

最後に本研究のテーマである東南アジアとの関係について見ておきたい。加入・転出共にその割合は多くはないが、一定程度の選手移動が認められる。Jリーグが始まって25年が経過する中で、当初は東南アジア各国と日本の間での選手の行き来はほとんどなかった。しかし、数年前にJリーグが打ち出した「アジア戦略」の影響もあり、徐々に増加の傾向にあるといえる。このことについて、株式会社Jリーグマーケティング海外事業部の大矢丈之氏は次のように語っている<sup>6)</sup>。

アジアに目を付け始めたのは2011年ごろです。東日本大震災があって来場者数が大きく落ち込み、このままではJリーグの成長戦略を描きづらいと危機感を抱くなか、考えたのがマーケットをアジア全体に拡大することでした。

このようなJリーグの「アジア戦略」がある一方、先に見てきたようなカテゴリー昇格の困難性という現実のなかで、今後、東南アジアへと向かう日本人サッカー選手の増加が予想される。では、実際に東南アジアの各国プロリーグにどの程度日本人サッカー選手が在籍するのであろうか。次節で確認してみよう。

表1 Jリーグの移籍状況

J1：加入									
J1	J2	J3	JFL	地域	大学	高校 ユース	海外	東南 アジア	計
43	39	1	2	0	20	40	24	2	171
25.1	22.8	0.6	1.2	0.0	11.7	23.4	14.0	1.2	100.0
J2：加入									
J1	J2	J3	JFL	地域	大学	高校 ユース	海外	東南 アジア	計
86	90	18	1	2	41	26	27	6	297
29.0	30.3	6.1	0.3	0.7	13.8	8.8	9.1	2.0	100.0
J3：加入									
J1	J2	J3	JFL	地域	大学	高校 ユース	海外	東南 アジア	計
18	63	38	4	11	30	2	10	1	177
10.2	35.6	21.5	2.3	6.2	16.9	1.1	5.6	0.6	100.0
J1：転出									
J1	J2	J3	JFL	地域	海外	東南 アジア	退団 引退	計	
48	84	21	4	4	17	3	17	198	
24.2	42.4	10.6	2.0	2.0	8.6	1.5	8.6	100.0	
J2：転出									
J1	J2	J3	JFL	地域	海外	東南 アジア	退団 引退	計	
60	96	62	8	24	11	3	57	321	
18.7	29.9	19.3	2.5	7.5	3.4	0.9	17.8	100.0	
J3：転出									
J1	J2	J3	JFL	地域	海外	東南 アジア	退団 引退	計	
4	30	38	22	27	6	3	54	184	
2.2	16.3	20.7	12.0	14.7	3.3	1.6	29.3	100.0	

上段：人数 下段：%

## 2) 東南アジアへの移籍状況

データ収集が可能であったシンガポール、カンボジア、タイ、フィリピン、マレーシア、ラオス、インドネシア、ミャンマーのプロリーグに在籍する日本人サッカー選手について整理した。なお、シンガポール及びカンボジアは2018年シーズン、その他の国は2017年シーズンのデータである。

**【シンガポール】**

シンガポールの1部リーグには、23名の日本人サッカー選手が在籍している。アルビレックス新潟シンガポール（以下、アルビSとする）には19名が在籍し、そのうち4名がJAPANサッカーカレッジからのインターンシップ選手<sup>7)</sup>となっている。アルビS以外のチームに在籍する4名の選手のうち、3名はアルビSに所属後移籍している。国内での移籍経路をみると、Jリーグに在籍経験のある選手は5名、日本の大学・高校・専門学校から直接入団した選手が15名（JAPANサッカーカレッジのインターンシップ選手4名含む）、他国のリーグ経験者が2名（いずれもドイツ下部リーグ）となっている。シンガポール国内で移籍した選手は1名のみである。

**【カンボジア】**

カンボジアの1部リーグには18名の日本人サッカー選手が在籍している。アルビSに在籍経験のある選手は5名で、Jリーグに在籍経験のある選手は6名となっている。カンボジア以外の国のリーグに所属経験のある選手は12名（シンガポール、タイ、カナダ、ポーランド、モンゴル、フィリピン、ラオスなど）で、カンボジア国内で複数のチームに在籍（国内移籍）経験のある選手は6名となっている。日本の大学・高校・専門学校から直接入団した選手が3名となっている。

**【タイ】**

タイでは1部リーグに10名、2部リーグに11名、3部リーグに24名、4部リーグに13名、合計58名の日本人サッカー選手が在籍している。アルビSに在籍経験のある選手は2部に1名、3部に2名、4部に1名となっている。Jリーグに在籍した経験のある選手は、1部に7名、2部に6名、3部に3名となっている。タイ以外の国のリーグに所属経験のある選手は、1部に5名（モンテネグロ、ポーランド、ラトビア、フィリピンなど）、2部に4名（シンガポール、ポーランド、ラトビア、インド、マレーシア、

カンボジア、ミャンマーなど）、3部に11名（ミャンマー、モンテネグロ、ブラジル、クロアチア、ラオス、シンガポール、モンゴル、ニュージーランド、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ドイツ、フィリピンなど）、4部に6名（ラトビア、アルゼンチン、ドイツ、ニュージーランド、モンテネグロ、シンガポール、ブラジル、ポルトガルなど）となっている。タイ国内で複数チームに在籍（国内移籍）経験のある選手は、1部に4名、2部に8名、3部に15名、4部に9名となっている。日本の高校・専門学校・大学から直接入団した選手は、1・2部におらず、3部に4名、4部に4名となっている。

#### 【フィリピン】

フィリピンの1部リーグには10名の日本人サッカー選手が在籍している。アルビSに在籍経験のある選手は2名で、Jリーグに在籍した経験のある選手は3名となっている。フィリピン以外の国のリーグに所属経験のある選手は6名（オーストリア、オーストラリア、インドネシア、ミャンマー、ラオスなど）で、フィリピン国内で複数チームに在籍（国内移籍）経験のある選手は3名となっている。日本の高校・専門学校・大学から直接入団した選手は3名となっている。

#### 【マレーシア】

マレーシアの1部リーグには4名の日本人サッカー選手が在籍している。アルビSに在籍経験のある選手は3名で（残りの1名もシンガポールリーグ経験者）、Jリーグに在籍した経験のある選手は1名となっている。全員がマレーシア以外の国（シンガポール、デンマーク、オーストラリア、アメリカ、キプロスなど）のリーグに所属経験がある。マレーシア国内で複数チームに在籍（国内移籍）経験のある選手や日本で高校・専門学校・大学から直接入団した選手もいない。

**【ラオス】**

ラオスの1部リーグには4名の日本人サッカー選手が在籍している。アルビSに在籍経験のある選手(シンガポールリーグ経験者1名)やJリーグに在籍した経験のある選手はいない。ラオス以外の国のリーグに所属経験のある選手は3名(パラグアイ、タイ、カンボジア、セルビア、ハンガリー、シンガポールなど)で、ラオス国内で複数チームに在籍(国内移籍)経験のある選手はいない。日本の高校・専門学校・大学から直接入団した選手は1名となっている。

**【インドネシア】**

インドネシアの1部リーグには5名の日本人サッカー選手が在籍している。アルビSに在籍経験のある選手は1名で、Jリーグに在籍した経験のある選手は2名となっている。インドネシア以外の国のリーグに所属経験のある選手は4名(アルゼンチン、タイ、香港、ドイツ、シンガポール、ミャンマー、ラオスなど)で、インドネシア国内で複数チームに在籍(国内移籍)経験のある選手は2名となっている。日本の高校・専門学校・大学から直接入団した選手はいない。

**【ミャンマー】**

ミャンマーの1部リーグには3名の日本人サッカー選手が在籍している。アルビSに在籍経験のある選手は1名で、Jリーグに在籍した経験のある選手は2名となっている。ミャンマー以外の国のリーグに所属経験のある選手は2名(シンガポール、タイ、モンテネグロ、ラオス、バーレーンなど)となっている。ミャンマー国内で複数チームに在籍(国内移籍)経験のある選手は2名で、日本の高校・専門学校・大学から直接入団した選手はいない。

以上の各国における日本人サッカー選手の在籍概要を表2に示した。その特徴について整理しておこう。まず、Jリーグ経験者が各国リーグに3割程度在籍しており、Jリーグ「後」の受け

皿となっている側面がある。一方、Jリーグ経験のないまま海外チームに所属した選手(学卒直後入団)は、シンガポールでは圧倒的に多く(65.2%)、次いでラオス(25.0%)となっている。このことと合わせて、各国リーグにはアルビS在籍経験者が一定程度存在していることから、シンガポール(=アルビS)が『東南アジア・サッカー・サーキット』の「入口」となっていることがうかがえる。ただし、シンガポールよりも競技力の高いタイへと移籍するケースは少なく、東南アジアのなかでもタイは独自の移籍マーケットが存在していると推察される。また、現所属チームの国以外への所属経験(複数国経験)をみても、シンガポールのみが極端に少ない状況(8.7%)にあることから、多くの選手にとって「最初の海外」となっている。逆に、タイは、現所属チームの国内での移籍経験(同国内移籍)が多く(62.1%)、タイ国内で移籍を繰り返す選手が存在することを示している。

表2 東南アジアのサッカーリーグにおける日本人選手の在籍概要

	在籍数		Jリーグ経験		学卒直後入団		アルビS経験		複数国経験		同国内移籍		
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	
シンガポール	23	21.7	5	65.2	15	95.7	2	8.7	1	4.3			
カンボジア	18	33.3	3	16.7	5	27.8	12	66.7	6	33.3			
タイ	58	27.6	8	13.8	4	6.9	26	44.8	36	62.1			
フィリピン	10	30.0	3	30.0	2	20.0	6	60.0	3	30.0			
マレーシア	4	25.0	0	0.0	3	75.0	4	100.0	0	0.0			
ラオス	4	0.0	1	25.0	0	0.0	3	75.0	0	0.0			
インドネシア	5	40.0	0	0.0	1	20.0	4	80.0	2	40.0			
ミャンマー	3	66.7	0	0.0	1	33.3	2	66.7	2	66.7			
合計	125	28.0	35	24.0	30	38	30.4	59	47.2	50	40.0		

### 3 日本人サッカー選手の移動プロセスの形成

第2章において、日本人サッカー選手の国内及び東南アジアにおける移動の全体像を確認してきた。本章では選手個人への聞き取り調査をもとに、彼らのサッカー選手としての移動プロセス

がどのように形成されてきたかを検討する。表3に聞き取り調査を行った日本人サッカー選手(17名)の概要と移動状況を示した。Jリーグ経験者は7名、学卒後に直接国外のチームに所属した者は5名である。また、高校・大学で国内ではトップレベルのチームの所属しているものが多い。

表3 調査対象者の移動状況一覧

仮名	生年	ユース・高校	大学	国内	国外
桜井真介	1984	全国強豪校(静岡)	関西1部	JFL → 県 → 地域	アルビス → シンガポール1部 → ミャンマー1部 → <b>引退</b>
井口達夫	1990	J1 下部(千葉)		JFL → (Sリーグ) → J3 → (Sリーグ・タイリーグ) → J3	アルビス → シンガポール1部 → (J3) → シンガポール1部 → タイ1部 → (J3) → <b>カンボジア1部</b>
国武俊太	1990	街クラブ(宮城)	関東1部		シンガポール2部 → 同1部 → <b>マレーシア1部</b>
川中典正	1987	県内強豪校(広島)		JFL → J2 → JFL → (Sリーグ) → J3 → 地域 → <b>JFL</b>	アルビス → シンガポール1部 → アルビス → (J3)
上野真	1988	県内普通校(神奈川)		ジャパンサッカーカレッジ	アルビス(インターン → 契約選手) → シンガポール1部 → ミャンマー1部 → シンガポール1部 → モルディヴ → <b>フィリピン1部</b>
山中正広	1986	全国強豪校(千葉)	関東1部	J2	アルビス → シンガポール1部 → ミャンマー1部 → <b>インドネシア1部</b>
ジュンジ(日系人)	1990	J1 下部(大阪)		JFL → J1 → (Sリーグ) → J2	アルビス → (J1) → アルビス → シンガポール1部 → (J2) → <b>マレーシア1部</b>
片岡寛俊	1982	県内普通校(千葉)	関東1部	JFL → J2	タイ1部 → 香港1部 → タイ1部 → <b>タイ2部</b>

猿渡浩敏	1982	県内強豪校(広島)	東京都1部	JFL → J2 → JFL	シンガポール1部 → タイ1部 → タイ3部 → <b>引退</b>
樋田大輔	1984	県内普通校(熊本)	九州1部	JFL	タイ1部 → タイ3部 → タイ2部 → タイ1部 → タイ3部 → <b>引退</b>
山下祐二	1984	全国強豪校(熊本)	九州1部	JFL → J2 → JFL	オーストラリア2部 → タイ2部 → <b>引退</b>
齊田一郎	1975	県内強豪校	関東1部		シンガポール2部 → オーストラリア州リーグ → <b>引退</b>
太井敬太	1987	県内強豪校		地域	タイ3部 → <b>カンボジア1部</b>
関山優	1992	J1 下部(神奈川)	関東2部	地域	<b>オーストラリア2部</b>
長谷川勇人	1993	J1 下部(静岡)	関東1部		<b>オーストラリア2部</b>

太字表記は現在の状況(所属)を示す。

### <限定化される進路選択とサッカー中心の生活>

東南アジアへと向かった選手たちの移動プロセスにおける第一の特徴は、進路選択の限定化にある。「全然エリートではない、でも高校進学の際はサッカーのことしか考えていなかった」という上野は、一般入試で進学した大学を中退し、郷里のサッカー仲間からの助言で専門学校(「JAPAN サッカーカレッジ」)へと進みシンガポールへと移動した。同じように、国武も「就職を前にして、またサッカーやりたくなくて」という理由で、シンガポールのトライアウトに挑戦した。このように、幼少期からサッカー中心の生活を送ってきた彼らは、進路選択時における基準をサッカーに置くしかない(限定化)状況にあったといえる。このことは以下の山中のコメントにも表れている。

最初は海外のシステムがよく分からなかったもので、取り敢えず、サッカーを続けたいという気持ちだけで、海外でもどこでもいいから、とにかくサッカーを続けると

いう気持ちが強かったですね。僕なんて、ホント、サッカーだけしかしたことがないので。ほかにどんな職業があるのかなんかも、どんなふうに勉強したら、どんな職業に就けるのかなんかも、まったく分かんないからですね。（山中）

また、川中のコメントからは、東南アジアへの移籍を選択する選手たちが、「やり切れていない」あるいはサッカー中心の生活から離れられないという心情を持ち合わせていることがわかる。

半年間、所属チームがなかったので、プータローしていた。ジュニアユース時代にお世話になったコーチが北信越リーグで監督をするということで、お金は出せないがうちに来ないかといってもらった。まあ、サッカー以外することもなく、それでとりあえず行ったんですよ。契約と言っても給料は無かったので、自分で探したアルバイトをしていた。綺麗に落ちていったんですよ。J1、J2、JFLと綺麗に。この時ですね、一番本当にどうしようかと思ったのは。ただ、半年間働いてみて思ったんだけど、時給とかで働いていても、ちゃんとしたお金をもらわないと、サッカーはできないと思い、シンガポールのトライアウトに挑戦したんです。（川中）

そして、東南アジアでのプロサッカー選手としての契約を成立させた選手たちは、川中が「こういうところ来ると、サッカーするしかないからですね。今のサッカーだけの生活は充実していますね」と語るように、引き続き、サッカー中心の生活を送れる喜びを実感するのである。以下の3名の選手のコメントからも同様のことが指摘される。

北信越リーグでは契約選手だったので、家と3食が付いていてちょっとしたお金(2～3万円)をもらって

ました。日本にいたら最低限の給料しかもらえない。それは本当に最低限で、家族を養えるとかのレベルではない。サッカーで飯を食うという意味では、東南アジアはうってつけの場だと思う。（桜井）

当時の契約は、月給 12,000 バーツ（約 40,000 円）と勝利給（3000 円）、それに住居と朝食が付くという内容だった。貯蓄できるほどの給料ではないが、遊びにも行かなかったので、普通に生活できた。それよりも、ここで初めて「プロサッカー選手」になれたと実感し、これから先は俺の実力次第だと思った。（太井）

やっぱり、サッカーやって金稼げることがやっぱり楽しいです。自分がずーと好きなサッカーをずーと続けて、もしこのままずーとこの生活を続けていけるんだったら、何歳までも続けたいです。（山中）

### <サッカー技量の評価をめぐる正当性>

次に、多くの日本人サッカー選手が口にするのが、自らのサッカー技量に対する評価についてである。決して国内では一流ではなかった選手や大学の新卒選手たちは、国内チームでの挫折や苦しい生活のなかで、自身のサッカー技量の正当性を求め、東南アジアへと渡ったものが多い。このことについて桜井は次のように語っている。

J2 の場合、いろんな関係があり実績がそのまま評価や給料に結びつくわけではない。シンガポールでは結果を出せばそれがフラットに結びつく。J2 だと試合に出続けた人はどうにか給料も上がるけど、末端の人は本当に生活もままならない。こちらだとチームが住むところも用意してくれて給料もいいので、プロサッカー選手としてプレーするにはとても良い環境と思う。（桜井）

このことに関して、井口も海外にはサッカー選手として生き残ることができる場があることを強調する。

日本にいるときは焦るんですよ。首切られたときとかに。焦るんですよ。ああ、もうサッカーできなくなると思いましたもん。どうしよう。仕事しながらサッカーやるのかなと思って悩みました。だけど、生きている価値を見いだせないと思う。仕事しながらやりたくないんですよ。だったらやめたほうが良いんですよ。仕事しながらだとかではサッカーに100%力を入れられないでしょ。でも世界のどこかには、プロとしてサッカーやれる場所があるんですよ。

さらに、彼らが東南アジア特有の問題(契約の問題やエージェント、オーナーとの関係など)に直面しながらも、井口が「日本いるときよりサッカーにやりがいがある。外国人として期待されているので」と語るように、「助っ人外国人」としてのやりがいを強く感じているのである。以下のように、山中や上野も同様にコメントし、「助っ人外国人」としてのプライドを強く感じさせた。

こっちでやっている、外国人枠でプレーできるということも大きいですね。自分の中ではプライドもあるし、誇りに思っているところもあるので。みんながみんなここに来て、もしJ1の人が来たとしても、じゃ外国人としてここでやれるかという、それはやっぱり選ばれた人じゃないとできないと思うんですよ。(山中)

契約できるかどうかということには、いろんなことがあるので監督の関係やチェアマンの力とか、そういうことを自分は学んできたので。どこの国の選手が好きとか、チェアマンの好みとか、現在の戦力の状況とか、自分の

関わるができないことが多い。だから、自分にできることをやって、自分を表現し続けることしかできないと思う。本田や香川、長友のレベルではないが、あくまでもシンガポールリーグでしかないけども、夢を持たせてあげることとか、できるんじゃないかと。子どもって純粹だから。自分のプレーしている姿を見て子どもたちが自分も頑張ろうと思ってくれたらと思う。（上野）

一方で、外国籍であるジュンジが「自分の中で、日本に帰ってJ3でもいいからやりたいと決めた。シンガポールでは活躍できる。ヨーロッパのクラブからオファーあればいいけど、気持ちとしては日本で決着をつけたい。2013年、シンガポールに外人枠で来て初めて日本でやりたいという気持ちになった」と語るように、東南アジアでの経験をステップに再度日本で挑戦する気持ちを持つ選手もいる。

#### <サッカー人脈の形成と駆使>

東南アジアへの移籍に際しては、多くの選手が「頼れる仲間たち」の存在を指摘する。彼らは、サッカー中心の生活を送る過程で同じような状況下にある仲間たちと「サッカー人脈」を築き上げてきたのである。国内でチームを探していた山中は、突然シンガポール（アルビS）からオファーをもらった際には、「いろんな人が、僕もいろんな人に相談していましたんで、まあ、ある程度まわりの人が話をしてくれていたりしたのかなあと僕は思っていますけど」と、具体性があるわけではないものの「サッカー人脈」への感謝を述べていた。以下のジュンジや片岡のコメントにあるように多くの選手たちが「サッカー人脈」を頼りに東南アジアへと移籍している。

アルビSへの移籍の時も、同級生の●●選手の紹介があった。知り合いのつながりや、友達の縁でどこへ行くかが決まることが多い。過去に一緒にプレーした選手や

監督に自分のDVDなどを送り、アウトになったときには連絡を取るようになっている。（ジュンジ）

タイには、●●選手にコンタクトを取っているいろいろな情報をもって、代理人を紹介してもらった。栃木、北九州で同じチームにいた選手が、1年前にタイにきていた。その選手が「タイは面白いよ」と勧めてくれて、話を聞いていたら面白そうだなあと思っていた。（片岡）

そのような「サッカー人脈」を駆使して「海外」を渡り歩く選手たちの間には、以下の上野のコメントにあるように、同じ境遇を経験した者同士としての信頼関係が存在している。彼らは、東南アジアのサッカー市場に関する情報を共有・交換しながら『東南アジア・サッカー・サーキット』を渡り歩くのである。

日本人の東南アジアの進出の多くは、先に行った選手とのつながりで行くことが圧倒的に多い。それが一番確実な方法。妙な代理人はいくらでもいるので、フェイスブックとかやっているとそういう人からかなり連絡がはいる。選手のほうが確実に信頼できる情報がはいる。毎日のように、みんなとは連絡は取っている。（上野）

#### <サッカーのある生活のさらなる延長>

限定化された進路選択の中で、「サッカー人脈」を駆使して東南アジアにたどり着いた選手たちは、「サッカー中心の生活」を送れることに喜びを感じていた。しかし、一方で、以下の桜井と樋田のように、これまでの「サッカー人脈」を頼りにした「サッカー中心の生活」とは異なる形で、「サッカーのある生活」を延長させ、今後の生活を切り開こうとする者も現れている。

東南アジアでプレーする最大のメリットはサッカーを通して、いろんな人に出会えること。サッカー人生の中で

本当にトップに行かない限りは、蓄えることのできるお金は限られている。ローカルチームに移籍すると本当にいろんな人と出会うようになる。（桜井）

例えば英語をビジネスレベルまで持っていかを考えた。気持ちは日本に戻って働きたいというはあるが、もう4年もいるので、こっちでのキャリアを生かして働いたり、自分ができることをタイやその他の国でやってみたい。ローカルチームのマネジメントには興味がある。基本的には、サッカー関係の仕事をしたい。クラブを運営することなどに興味がある。（樋田）

このようなサッカーを中心として生活を組み立てるだけでなく、生活の安定や拡張を基底に据えてサッカーを「利用」する人たちも存在するようになった。カンボジア初の日本人プロサッカー選手となった太井は、将来的にも、カンボジアから離れるつもりはない」と断言し、カンボジア人女性と結婚した。そして、現在も、プロサッカー選手として活躍しながら、サッカーを通じた日本とカンボジアの橋渡しとなるような仕事を模索している<sup>8)</sup>。

また、オーストラリアの州リーグ（実質、国内2部リーグ）でプレーする関山は、「ワーキングホリデー」で渡豪し、契約選手として3年目を迎えていた（2018年）。「ワーキングホリデー」での1年間を終えた後は、3か月間の「ファーム」（農場）での就労によってその期間を1年延長し、3年目は語学学校に入学し就学ビザを取得することでサッカー選手としてプレーを続けている。2017年にはベストイレブンに輝き、2018年には本田圭介選手が所属する1部チームに彼の2得点で勝利するなどの活躍をみせている。しかし、彼は、以下のコメントにあるように、決してプロ選手としての上昇志向や「サッカー中心の生活」への固執があるわけではない。

今は、プロサッカー選手になるという選択肢の優先順位

がさがった。でも、サッカーはしたいし、サッカーでお金もらえるのは幸せだから。オーストラリアで、サッカーである程度お金をもらい、語学力をつけて、いろんな経験をすることで、今後につながると思っている。できるところまでは、今の生活を続けたい。オーストラリアで仕事があってビザが取ればできる限り残りたいたいと思っている。

同様にオーストラリアでプレーする長谷川は、「ファーム」で働いた後の「ワーキングホリデー」2年目を迎え、現在は、契約サッカー選手としての収入とレストランでのアルバイト収入で生計を立てている。外国人の一般男性とルームシェアしながらサッカー選手として生活する彼のコメントからは、サッカーのある生活の新たな形が見えてくる。

プロ選手という感じはあまりない。お金はもらっているが、プロ選手の生活のイメージが分からないので。東南アジアの他の国のリーグに行くことは考えていない。Aリーグ(国内1部リーグ)に上がるのは難しいとエージェントにも聞かされてきたので、こっちに来るときから、英語を習得したり、いろんな経験を積むことも目的の一つになっているので、いまさらプロを目指すということはない。学生時代まで、サッカーのみの生活を送ってきたが、こっちに来ていろんなことをしながら大好きなサッカーをやれるというのは自分にあっている。将来は日本に帰って就職するつもりだが、なにがしかサッカーに関わっていきたいとは思っている。

#### 4 まとめ

最後に、東南アジアにおける日本人サッカー選手の移動プロセスの概要を整理し、まとめとする。

幼少期からサッカー中心の生活を送ってきた選手たちは、限定

化された進路選択に迫られ、その生活を継続できる場として東南アジアを選択していた。そして、多くの選手は、国内でのサッカーキャリアを通して、「やり切れていない」あるいはサッカー中心の生活から離れられないという心情を持ち合わせていた。そのような彼らが、東南アジアにおいてプロサッカー選手としての契約を成立させると、引き続きサッカー中心の生活を送れる喜びを実感するのであった。「やり切れていない」という心情を持つ選手たちは、同時に、自らのサッカー技量に対する評価の正当性に疑問を持っており、徐々に「助っ人外国人」としてのやりがいを強く感じていくようになる。また、東南アジアへの移動プロセスで重要な役割を果たすのが、サッカー中心の生活を送る過程で築き上げてきた「サッカー人脈」である。彼らの中には、同じ境遇を経験した者同士の信頼関係があり、さまざまな情報を共有・交換しながら『東南アジア・サッカー・サーキット』を駆け巡っているのである。

しかし、選手たちの中には、サッカー中心の生活から、そのあり方を見直す者の現れるようになった。サッカーで生活を支えるのではなく、生活の安定や拡張を基底に据えてサッカーのある生活を延長させようとする者たちである。これまでのスポーツ労働移民研究では対象とされることのなかった「サッカー移民」が存在するというのである。

この新たな形の「サッカー移民」の分析については、今後の課題としたい。加えて、本研究では、東南アジアへと移動する日本人選手たちの現状を確認することができたが、彼らのような選手を作り出してきた日本サッカー界のシステムについては言及することができなかった。サッカー中心の生活へと導くシステムとは如何なるものなのか、これについても今後の課題としておきたい。

## 注

- 1) 「スポーツ人材育成と社会移動の社会学」（研究代表者：甲斐健人、研究期間：2012-2014、課題番号：24300217）及び「東南アジアにおけるサッカー移民とグローバリゼーション」

- ン」（研究代表者：甲斐健人、研究期間：2016-2018、課題番号：16H03228）
- 2) 2018年8月17日閲覧。<https://www.footballchannel.jp/2017/09/30/post233445/5/>
  - 3) 上記1)の調査として、シンガポール、タイ、オーストラリア、カンボジアにおいてインタビュー調査を行ってきた。
  - 4) 同シーズンは2018年2月23日開幕した。
  - 5) <https://www.jsgoal.jp/transfer/2017/>を参照のこと
  - 6) 2018年12月11日閲覧。『WEDGE Infinity』（2017年11月17日付）<http://wedge.ismedia.jp/articles/-/11091>
  - 7) アルビスでは、系列のサッカー専門学校「JAPAN サッカーカレッジ」（新潟県）から送り込まれるインターンシップ選手を受けいている。彼らは、授業料を払いながら、学生としてプロサッカーチームであるアルビスでプレーし、単位を取得する。
  - 8) 実際に彼は現地クメール人の子どもたちを対象にしたサッカースクールや孤児院への訪問活動を継続している。

## 文献

- 石原豊一, 2013, ベースボール労働移民—メジャーリーグから「野球不毛の地」まで, 河出書房新社.
- 高橋義雄, 2004, 日本人Jリーグ選手の国際移籍の要因に関する研究, 「スポーツ産業学研究」14(1): 13-22.
- Maguire, Joseph, 1996, "Blade Runners: Canadian Migrants, Ice Hockey and the Global Sports Process", *Journal of Sport and Social Issues*, 20: 335-360.
- , 1999, *Global Sport*, Polity Press.

## 付記

本研究はJSPS 科研費JP24300217, JP16H03228の助成を受けたものです。